

日本ロレンス協会第 49 回大会プログラム

- ◎日 時： 2018 年 6 月 30 日（土）、7 月 1 日（日）
◎会 場： 東北学院大学土樋キャンパス ホーイ記念館地下 1 階ホール
住 所： 〒980-0022 宮城県仙台市青葉区五橋 2 丁目 7-25
連絡先： 東北学院大学文学部 井出達郎研究室
Tel: 022-264-6455（井出研究室）
e-mail: tatsuro@mail.tohoku-gakuin.ac.jp

- ◎交通アクセス： 地下鉄南北線「五橋駅」から徒歩 5 分
JR「仙台駅」西口から徒歩 20 分

- ◎昼食のご案内： 両日ともホーイ記念館 1 階「石窯パン工房ばーすでい」が営業しております。また、大学から徒歩圏内の周辺にも食事処がございます。

- ◎宿泊のご案内： 今大会は懇親会が大学とは別会場になっております。懇親会の会場は仙台駅西口に近いため、その付近のホテルを利用されると懇親会後の移動が楽になります。プログラム最後に宿泊施設をリストにして掲載しました。仙台駅西口に近い順に掲載しておりますので、ご参考にして下さい。

【役員会】

- 日 時： 6 月 30 日（土）10:30～12:30
場 所： 東北学院大学土樋キャンパス ホーイ記念館 2 階第 1 会議室
※ 昼食を用意します。代金は当日お支払い下さい。

第 1 日目： 6 月 30 日（土曜日）

- 受 付： 12 時 30 分～
総合司会： 井出 達郎（東北学院大学准教授）

- ◎ 開会の辞： 会長 浅井 雅志（前京都橘大学教授）（13:00～）
◎ 開催校挨拶： 村野井 仁（東北学院大学文学部長）（13:05～）

研究発表

（13:10～13:50）

司会 鈴木 俊次（愛知学院大学名誉教授）

ヘプバーン大尉の“passional changes”

——「大尉の人形」に見られるロレンスの新しい男女関係の希求——

山田 晶子（愛知大学名誉教授）

*休憩 13:50～14:00

シンポジウム

(14:00~17:00)

ロレンスに触れる—象徴、劇場、写真

司会 新井 英永 (熊本大学教授)

偶有性への触発—D. H. ロレンスとキメラの象徴

講師 井出 達郎 (東北学院大学准教授)

『ロスト・ガール』再読—ライブ・パフォーマンスと映画、そして人間の知覚

講師 星 久美子 (愛知学院大学准教授)

モダニズムにおける「快楽」と「本物性」—ロレンス、プルースト、写真

講師 高村 峰生 (関西学院大学准教授)

◎ 総会 (17:00~17:40)

◎ 懇親会 (18:30~20:30)

場所: DUCCA 仙台駅前店 (仙台市青葉区中央3-6-10 マックスマクタビル3F)

会費: ¥5,000 (大会当日受付でお支払い下さい)

第2日目: 7月1日 (日曜日)

ワークショップ

(10:00~12:30)

オクスフォード英文学と冷戦期の／ポスト帝国日本の「英文学」
—F・R・リーヴィスの退場を規定した歴史的可能性の条件とは？

司会 大田 信良 (東京学芸大学教授)

オクスフォード英文学こそがF・R・リーヴィスの退場を規定した歴史的可能性の条件だったのか?—「グローバル冷戦」におけるポスト帝国日本の「英文学」とロレンス研究

講師 大田 信良 (東京学芸大学教授)

偉大なる伝統の創出?—F・R・リーヴィスとスコットランド文学の分離

講師 高田 英和 (福島大学准教授)

文学と科学の対立を歴史化する

講師 川田 潤 (福島大学教授)

◎閉会の辞: 副会長 田部井世志子 (北九州市立大学教授)

研究発表

ヘプバーン大尉の“passional changes”

—「大尉の人形」に見られるロレンスの新しい男女関係の希求—

山田 晶子（愛知大学名誉教授）

1923年に出版された「大尉の人形」は、「狐」や「てんとう虫」等の中編小説と同じ頃に執筆されたD. H.ロレンスの中編小説である。これらの作品群は時代設定が第一次世界大戦末期あるいはその直後であり、多かれ少なかれ類似した主題を持っている。主人公であるヘプバーン大尉はイギリス軍に所属しておりドイツに来たが、そこでハンネレという女性と恋愛関係になる。妻の死後にヘプバーン大尉は新しい人生をハンネレと始めようと思うが、彼が求める女性との関係は、これまでの彼がしてきたような男性が女性にひざまづく関係ではなくて、彼女に彼を敬愛し従うことを求める関係（“I'll be honoured and I'll be obeyed: or nothing”）である。研究者たちはヘプバーンのこの男女関係について異なった意見を唱えている。筆者は“honour and obey”の思想は通常の意味ではなくて、ロレンスのユニークな思想であると捉える。ロレンスは『恋する女たち』において「星の均衡」という男女関係を唱道しているが、ヘプバーン大尉の説く“honour and obey”と「星の均衡」の思想との関係にも触れたいと思う。

筆者は、また、彼の“puppetness”は彼が軍隊に所属することからも生じていた、と捉える。彼は中尉であり、ゆえに軍隊は彼を「人形」として扱っていたと思われる。この作品の題名“The Captain's Doll”の“doll”が表す象徴には様々なものが込められているのであり、このことがこの中編小説を深みがあるものにしていていると思われる。本発表において筆者は、ロレンスが「悲劇の時代」を乗り越えるために模索した新たな女性との関係は何かを論じようと思う。

シンポジウム

ロレンスに触れる—象徴、劇場、写真

司会 新井 英永（熊本大学教授）

昨年、高村峰生氏の『触れることのモダニティ—ロレンス、スティーグリッツ、ベンヤミン、メルロ＝ポンティ』が出版された。これを契機として企画されたこのシンポジウムは、D・H・ロレンスと「触れること」あるいは「接触＝触覚」との関係の再検討を目的とする。「再検討」としたのは、昨年の日本ロレンス協会第48回大会シンポジウム（「情動、共感、D. H. Lawrence とその周辺」）で掲げられた「情動、共感」同様、「触れること」や「接触」、「触覚」は、ロレンス研究における古くて新しいテーマだからである。たとえばロレンスには、「盲目の男」や「ヘイドリアン（あなたがぼくに触れた）」といった短編小説をはじめ、「触れること」が人間関係において決定的な重要性を持つ作品が多い。また、他者とのあるべき接触や関係性を手放した現代人を批判する『チャタレイ卿夫人の恋人』についてのこのようなエッセイも多数存在する。つまり、「接触＝触覚」の復権を唱えた作家としてのロレンス像は定着して久しい。

一方、近年の批評動向において、フーコーやデリダが結びつけられることの多かった「言語論的転回」の後、ドゥルーズもしくはドゥルーズ＝ガタリと深く関わっている「情動論的転回」の動きと並行し、感覚論も活発になった。この分野においては、視覚論ないし視覚文化論が目覚ましい進展を見せてきている。ある意味この流れに棹さしながらも、その視覚中心主義に抗する形で生じてきた「触覚論的転回」とでも呼ぶべき文脈の中に、本シンポジウムは位置づけられるであろう。モダニズムの歴史的コンテクストに着目するとき、変化した時間・空間感覚とともに視覚／触覚という対立が立ち現われてくる。この観点から、従来の精神／血、言葉／肉体等のロレンスの二項対立を再考し、新たな読解を提示できればと願っ

ている。

『触れることのモダニティ』の著者・高村氏は、今回は、ロレンスとプルーストによる写真の捉え方を比較考察し、モダニズム的快樂の二側面を浮き彫りにする。井出氏は、後期作品を取り上げ、偶有性を触発するキメラの象徴を通してロレンスが探求した単純な結合ではない接触について論じる。星氏は、劇場と知覚という観点から主人公の逸脱・変容を捉え直し、『ロスト・ガール』における接触＝触覚やプリミティブなものへの憧憬の要素を指摘する。新井は、必要かつ可能であれば、ドゥルーズもしくはドゥルーズ＝ガタリやデリダ等の感覚論を扱い、ロレンスの触覚論的読解のさらなる可能性を探ってみたい。

偶有性への触発—D. H. ロレンスとキメラの象徴

講師 井出 達郎（東北学院大学准教授）

高村峰生氏が『触れることのモダニティ』において詳細に論じているように、ロレンスにとって接触という主題は、単に身体的な問題ではなく、社会および文化的な問題としてあった。その問題の一つとして、近代の個人主義への批判を挙げることができる。エッセイ「人は互いを必要とする」でロレンスは、近代が重視してきた個人主義を批判し、互いが互いを必要としているという関係性の重要性を、接触の問題として論じている。だがロレンスの主張は、他者との結びつきか個人か、という単純な二者択一には決してなっていない。ロレンスがそこで提示しているのは、接触を通じてこそ真の個性が達成されるという、一見すると矛盾に見える主張である。つまりロレンスにとって接触とは、単純な一体化や結合ではなく、個人主義を乗り越えつつ、同時に真の個性を獲得する契機でもある、ということである。

今発表は、ロレンス自身が「重要かつ厄介な事実」と認めるこの独自の接触の問題が、後期の作品群—旅行記『エトルリアの故地』、小説『羽鱗の蛇』、エッセイ『黙示録』—に繰り返し現れる、キメラの象徴を通して探求されていることを論じる。キメラとは、自身のうちに個を分節しながら接続する線を孕んだ存在として、それ自体が接触という主題と共鳴している。だがさらにロレンス作品に特異なのは、この象徴が単純な一体化や結合といった静的な構造の表現ではなく、個体が個体としての輪郭を備えつつ、同時に他者にもなりうるという動的な感覚を呼び起こすものとして描かれている点にある。個体でありながら他者でありえたかもしれないという感覚、近年使われる言葉でいえば、偶有性という感覚、ロレンスにとってキメラという象徴は、ロレンス独自の接触の問題に対して、その偶有性を文字通り触発するものとしてある。

『ロスト・ガール』再読—ライブ・パフォーマンスと映画、そして人間の知覚

講師 星 久美子（愛知学院大学准教授）

高村峰生氏は『触れることのモダニティ』（2017）において、D・H・ロレンスが1925年から1930年の間に執筆した後期作品—『エトルリアの故地』、『チャタレイ夫人の恋人』、ふたつのセザンヌ論「芸術とモラル」と「絵画集序論」—に見られる接触＝触覚についての言説を当時の社会的・政治的なコンテクストに関連させて考察している。高村氏は、触覚という感覚のモードがロレンスの著作全般において重要であることを認めつつも、それは「更新」されているとして、後期作品の特異性、とくにプリミティブなものやファシズム的なものとのつながりを指摘する。では、中期作品に分類される『ロスト・ガール』（1920）はどうだろうか？この作品においても高村氏が指摘する後期作品の特徴、接触＝触覚、プリミティブなものへの憧憬が現れてはいまいか？・・・とくささやかな挑戦をしてみたい。くささやかというものは、高村氏はロレンスのプリミティブなものへの関心は、1920年のイタリア滞在中に芽生えたと捉えているため、『ロスト・ガール』も彼の議論の射程に入る可能性は十分にある。

従来、『ロスト・ガール』は、主人公アルヴァイナ・ハフトンが19世紀から20世紀にかけ

て英国中産階級が規範とした「美しいイギリスの娘」あるいは「家庭の天使」というステレオタイプから逸脱・変容していく、一種の「新しい女」小説として読まることが多かった。本発表では、二種類の娯楽形態（劇場におけるライブ・パフォーマンスと映画）、およびヴァルター・ベンヤミンがそれらと密接な関連があると論じる人間の知覚（とくに触覚と視覚）という観点からこのアルヴァイナの逸脱・変容を解釈し直すとともに、高村氏が明らかにしたロレンス後期作品における触覚言説の特異性が『ロスト・ガール』にすでに現れていることを指摘したい。

モダニズムにおける「快楽」と「本物性」——ロレンス、プルースト、写真

講師 高村 峰生（関西学院大学准教授）

本発表では、テオドール・アドルノの「ヴァレリー、プルースト、美術館」にならって、ロレンスとプルーストという二人の芸術家が写真という近代のメディアに対して取った対照的な態度をモダニズムの二側面を示すものとして考察してみたいと思う。『触れることのモダニティ』で述べたように、ロレンスは写真を非触覚的なメディアとして批判し、事物の触覚性を把握する芸術家としてセザンヌを高く評価した。「ありのままを写す」という写真についての一般的な通念に抗して、ロレンスは「ひとたび写真を知ってしまうと、本物により近い表現は、当然のことながら非常に難しいことになってくる」と「絵画集序論」で述べ、「本物らしさ」の位相を意図的にずらしている。ロレンスはまた「ポルノグラフィと猥褻」などにおいて、写真のような複製技術が人々を真の身体的な快楽から遠ざけていると主張している。

これとは対照的に、プルーストは『失われた時を求めて』で「快楽には写真と似たところがある」と述べている。プルーストにとって、快楽とは直接的な出会いや接触によってよりは、時間や空間が複雑に絡み合った事物やイメージとの邂逅によってもたらされるものである。この邂逅はプルーストにとってきわめて触覚的なものでもある。たとえば主人公のアルベルチヌとのキスは、バルベックという土地をめぐる記憶を惹起するという点で重要であり、このことをプルーストは「写真という最新の技術」によってもたらされる効果と比較している。プルーストにとって写真とは、ありのままに事物を写すものであるよりは、事物のうちに隠れた諸相を明るみに出すものであり、また人物の過去を保存するものでもある。彼の写真への愛着と収集癖は、事物や人物を様々な相において眺めるという快楽と深く結びついているのである。

このような対照的な二人のモダニズム作家の比較を通じ、写真的なものと快楽の関係について考察するのが本発表の目的である。そこにおいて、二人がリアリズム的な「本物」性からどのようにずれていたか、そしてモダニズム的な快楽の二つの方向性をどのように形象化していたかが浮き彫りにされるだろう。

ワークショップ

オクスフォード英文学と冷戦期の／ポスト帝国日本の「英文学」

——F・R・リーヴィスの退場を規定した歴史的可能性の条件とは？

司会 大田 信良（東京学芸大学教授）

本ワークショップは、かつて Francis Mulhern, *The Moment of Scrutiny* (1979) において提示された議論、すなわち、英国オクスフォード大学ならびに米国ハーヴァード大学で学び、冷戦のさなかである 1951 年 *Essays in Criticism* を立ち上げた F・W・ベイトソンにより、アカデミズムならびにジャーナリズムの研究・教育空間において F・R・リーヴィスの退場を

印しづけたとされる議論を、あらためて、「グローバル冷戦」とその地政学的関係から再検討すると同時に、第2次大戦で敗戦を経験したあとに復興・再興されることになる日本の「英学」、あるいは、ポスト帝国日本の「英文学」を、リーヴィスが解釈・評価したD・H・ロレンスとロレンス研究にも注意を払いながら、解釈することを目的とする。

21世紀の現在とは違うかたちで、人文学・ヒューマニティーズの危機が問題とされ、アンチ・ヒューマニズムあるいはインヒューマンの登場が議論された時代をあらためて振り返ることにより、科学と文学の対立、たとえば、C・P・スノウとリーヴィスとの「2つの文化」をめぐる論争やジョージ・スタイナーの日本における受容を、現在のアクチュアリティにおいて、取り上げることににより、すでにこれまで、戦後日本の「英文学」やロレンス研究の「外部」の文学・文化空間において論じられてきた「アメリカの影」を、新たなやり方で、探ってみることになるだろう。戦後日本の文学・文化ならびに政治・経済・軍事を重層決定してきた「アメリカの影」を意味あるやり方で解釈するためには、日米のインターナショナルな関係性においてというよりは、むしろ、グローバルな空間性に関いたうえでとらえるべきではないか。たとえば、「アメリカの影」といわれてきたものは、「英文学」あるいは第2次大戦敗戦後のポスト占領期に復興された日本の「英学」の創られた「伝統」を媒介にして結ばれた日英のさまざまな絆あるいはそうした絆の関係性が孕むさまざまなズレにおいてこそ、その存在を読み取り認識すべきなのではないか。ひょっとしたら、「アメリカの影」ではなく「帝国イギリスの影」を、われわれは、いちどは問題にすべきなのかもしれない、といったことをワークショップで討議してみたい。

オクスフォード英文学こそが

F・R・リーヴィスの退場を規定した歴史的可能性の条件だったのか？

—「グローバル冷戦」におけるポスト帝国日本の「英文学」とロレンス研究

講師 大田 信良（東京学芸大学教授）

オクスフォード英文学のネットワークあるいはベイトソンの *Essays in Criticism*こそが、F・R・リーヴィスの退場を規定した歴史的可能性の条件だった、と「スクルーティニー（派）の瞬間・契機」について議論した Mulhern は以下の引用のように提示していたかに思われる。“Yet it was just at this moment of critical fulfilment that Leavis and *Scrutiny* were most disturbingly challenged. 1951 had seen the founding of *Essays in Criticism*, a quarterly journal of literary studies edited from Oxford by Leavis's old antagonist, F. W. Bateson....[The new journal's] main objective was to transcend what its editor had long regarded as the chief limitation of *Scrutiny* criticism: a lack of scholarship” (Mulhern 297-98). この議論をあらためて米国中心の米ソ対立とは異なる「グローバル冷戦」という歴史的コンテクストに置き直すことからはじめて、本発表は、第2次大戦敗戦後のポスト占領期に「復興」した「英学」の「伝統」、言い換えれば、ポスト帝国日本の「英文学」とロレンス研究との矛盾を孕んだ関係を批判的に吟味しつつ新たな解釈の可能性を探りたい。リーヴィスにとって、なぜロレンスだったのか？他方、ポスト帝国日本の「英文学」のメインストリームやエスタブリッシュメントは、なぜロレンスではなかったのか？

別の言い方をするなら、Mulhern の議論をその歴史性において解釈することの意味は、戦後あるいはモダニティという条件のもとにある日本の歴史を、すでにこれまで論じられてきた「アメリカの影」のみならず、むしろ、「帝国イギリスの影」に注目することで、新たにグローバルな空間性に関いたうえで捉え直す契機ともなること、この可能性を問題提起することにあるのではないか。

偉大なる伝統の創出？

—F・R・リーヴィスとスコットランド文学の分離

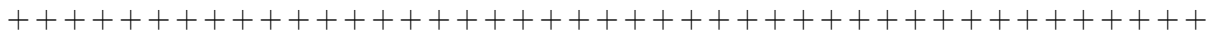
講師 高田 英和（福島大学准教授）

1948年に『偉大なる伝統（*The Great Tradition*）』を記したF・R・リーヴィス（1895-1978）は、その序章とも言うべき「第1章」、その最後の「註」に、次のような指摘を残している。“[S]he [Emily Brontë] broke completely [...] with the Scott tradition that imposed on the novelist a romantic resolution of his themes [...]. Out of her a minor tradition comes, to which belongs, most notably, *The House with the Green Shutters*” (27). 上記からは、英文学の伝統を創出する際に、リーヴィスは、どうやら、スコットランド文学をその傍らに置いていたということがわかるであろう。より正確に言い換えるのであれば、それは、リーヴィスによって創られた／捏造された英文学の伝統は、スコットランド文学とその伝統を排除・消去したうえで、成り立っているということになるだろう。そこで、本発表は、上述の引用を手始めにして、リーヴィスの提示する英文学の伝統、すなわち、英国性（Englishness）、その創造と意義を、スコットランド性（Scottishness）の不在という観点から考察する。その際、リーヴィスが消失・不可視化させたであろう「菜園派（Kailyard School）」と「スコティッシュ・ルネッサンス（Scottish Renaissance）」に着目しながら、彼による偉大なる英文学の伝統の誕生、そのメカニズムを明らかにしたい。さらに、時間が許せば、この伝統の出現を可能とした要因を、リーヴィス、その彼の個人の問題として帰結するだけでなく、同時に彼が置かれた（英国国内外の）社会・歴史的コンテクストとの関係性において、探ってみたい。

文学と科学の対立を歴史化する

講師 川田 潤（福島大学教授）

1959年のC・P・スノウによるリード講演「二つの文化と科学革命」に対する、1962年のF・R・リーヴィスのリッチモンド講演「二つの文化？」に端を発する論争は、文学と科学の関係性をめぐるはずであったが、結局、スノウの小説家としての資質などに論点がずれ、両者の関係性について議論の深まりはほとんどみせなかったかもしれない。だが <二つの文化論争>から既に半世紀以上経過した現在（の日本）でも、未だにこの二項対立は（科学の優位性あるいは文学・人文学の無用さという形で）機能している。本発表では、第一に、1960年前後にこの論争がおかれていた（はずの）歴史的状況とその意義を、（アメリカという補助線をひきつつ）グローバルな状況におけるイギリスという空間において捉え、冷戦期のイギリスの（英）文学研究の状況を考察することを目的とする。第二に、この議論の背景にある19世紀末のマシュー・アーノルドとT・H・ハックスリーとの文学と科学をめぐる議論を経由し、リーヴィスが夢想した学際的な（英文学）研究の対象の時代、17世紀にまで遡り、英文学という新しい学問の黎明期とこの二項対立との関係性を近代の中に位置付け、その現代的な意義を再考したい。その際、Michael Bellが、“Schiller [*Letters on the Aesthetic Education of Man*] combined Kant's sense of the autonomy of the aesthetic with the Rousseauvian tradition of moral sentiment to form one of the most cogent arguments we have for the moral value of aesthetic experience” (“The Metaphysics of Modernism: Aesthetic Myth and the Myth of the Aesthetic.” *The Arts and Sciences of Criticism*. Ed. David Fuller and Patricia Waugh. Oxford: Oxford UP, 1999. 238-56.) と述べているように、<二つの文化論争>を、近代社会の形成過程における道徳と美学的体験の問題として捉え、過去の“dissociation of sensibility”との関係だけでなく、(Terry Eagletonの*The Ideology of the Aesthetic*を批判した) Bellの「モダニズムの形而上学」論との関係において、検討できればと考えている。



東北学院大学土樋キャンパスまでのアクセス



地下鉄南北線「五橋駅」から徒歩5分/JR「仙台駅」西口から徒歩20分

土樋キャンパス キャンパスマップ



※ **27** がホーイ記念館になります。
記念ホールは地下1階になります。

懇親会会場 DUCCA 仙台駅前店までのアクセス



地図データ©2018 Google, ZENRIN

地下鉄南北線「仙台駅」から徒歩2分／JR「仙台駅」西口から徒歩3分

大会会場周辺ホテル情報

今大会は懇親会が大学とは別会場になっております。懇親会の会場は仙台駅西口に近いため、その付近のホテルを利用されると懇親会後の移動が楽になります。仙台駅西口に近い順に掲載しておりますので、ご参考にして下さい。

価格は「じゃらん」で「シングル朝食付き 1泊、税抜」の条件で調べたものです。曜日・シーズンで異なりますので、詳細は各自でご確認ください。

【仙台駅西口付近のホテル】

・仙台ワシントンホテル (JR 仙台駅西口より徒歩 3分) 8,425 円～

住所 宮城県仙台市青葉区中央 4-10-8 TEL : 022-745-2222

・ホテルユニサイト仙台 (JR 仙台駅西口より徒歩 3分) 5,694 円～

住所 宮城県仙台市 青葉区中央 4 丁目 2-3 TEL : 022-716-0123

・ホテルセントラル仙台 (JR 仙台駅西口より徒歩 3分) 4,444 円～ (朝食なし)

住所 宮城県仙台市青葉区中央 4 丁目 2-6 TEL : 022-711-4111

・仙台国際ホテル (JR 仙台駅西口より徒歩 5分) 8,200 円～

住所 宮城県仙台市青葉区 中央 4 丁目 6-1 TEL : 022-268-1111

・ホテルフォーリッジ仙台 (仙台駅西口より徒歩 5分) 4,165 円～

住所 宮城県仙台市青葉区中央 4 丁目 7-1 TEL : 022-221-3939

・ホテルグリーンマーク (JR 仙台駅西口より徒歩 5分) 5,092 円～

住所 宮城県仙台市青葉区中央 4-8-10 TEL : 022-224-1050

・東横イン仙台駅西口中央 (JR 仙台駅西口より徒歩 7分) 5,800 円～

住所 宮城県仙台市 青葉区中央 1 丁目 1-10 TEL : 022-726-1045

・ユニゾイン仙台 (JR 仙台駅西口より徒歩 7分) 5,000 円～

住所 宮城県仙台市青葉区中央 4-8-7 TEL : 022-262-3211

・ホテルベルエア仙台 (JR 仙台駅西口より徒歩 12分) 5,509 円～

住所 宮城県仙台市 青葉区一番町 1-4-8 TEL : 022-217-8511

【その他のホテル】 ※東北学院大学の近くをご希望される方はご利用ください。

・アパヴィラホテル仙台駅五橋 (地下鉄南北線五橋駅から徒歩 2分) 5,277 円～

住所 宮城県仙台市若林区五橋 3 丁目 1-1 TEL : 022-266-3111
